

## 三澤勝衛『風土産業』は どう受け継がれてきたのか

### 1 はじめに

信州における市民科学のさきがけとして知られる三澤勝衛は、1885年に長野県更級郡更府村で生まれ、1920年から病気で亡くなる1937年まで旧制諏訪中学校（現、長野県諏訪清陵高等学校）で、地理の教師として教鞭を執りました。当時の地理の対象の広さもありますが、地理学の実践的活動から、太陽黒点の観測まで広範囲にわたって活躍しました。三澤勝衛の生涯については、藤森栄一『信州教育の墓標—三沢勝衛の教育と生涯』（1973年、学生社）、宮坂広作『風土の教育力—三沢勝衛の遺産に学ぶ』（1990年、大明堂）が参考になります。

『風土産業』は、そのような三澤勝衛の代表作です。その『風土産業』はどのように成立し、読み継がれてきたのでしょうか。その小史をたどってみることにしましょう。

なお、20世紀の出版に関しては、当時の価格の参考として米10kgの値段を森永卓郎監修『物価の文化史事典』（2008年、展望社）の30～31頁からあげることになります。

### 2 三澤勝衛は『風土産業』を 出していない

実は三澤勝衛は、生前に『風土産業』という書籍を出版していません。三澤といえば『風土産業』であり、『風土産業』といえばすぐに三澤勝衛の名前が挙げられるほど、三澤の代表作であることはまちがいないのですが、これはどういうことでしょうか。

三澤の著作を代表するとともに、最晩年に書き遺した、いわば遺著のような性質を帯びながら、もっともわかりやすく三澤の思想が現れていることが、その背景にありそうです。

### 3 最初の「風土産業」(1937年)

三澤は『風土産業』という本は出していないのですが、死に至る病床で著した『新地理教育論—地方振興とその教化』（1937年、古今書院、図1）の後編「社会を対照としての地理的教化」の第三章のタイトルが「風土産業」です。ここには「前記」が付されており、それによると長野県下伊那郡における「青年郷土講習会？」で青年会の人達を対象に4時間程度で行った講演をベースとすることが記されています。

執筆時にすでに深刻な病魔に冒されていたことは「序」と「後記」に記されており、本人も覚悟の上での執筆であったことがわかります。

三澤勝衛を理解する上で欠かせないキーワードが「風土」ですが、「後記」末尾は「従つて、その両者を併読してもらへば、私の考へて居る風土そのものを最もよく理解して貰ふ事にもなるわけである。」と締めくくられており、本書の重要性がにじみ出ています。

「風土産業」を収めた『新地理教育論』は、4円80銭で、当時の米10kgは2円76銭でした。専門書でもあり、一般的な感覚ではかなり高価だったのではないかと思われます。

以下で取り上げる『風土産業』は、基本的にこの後編第三章「風土産業」を中心にする書籍です。

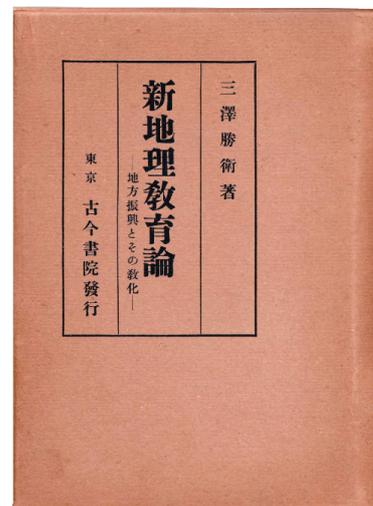


図1:『新地理教育論』

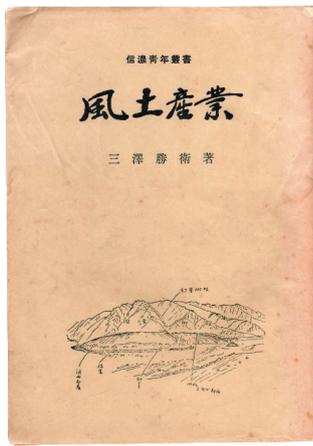


図2: 信濃教育会編『風土産業』  
(信濃毎日新聞社)

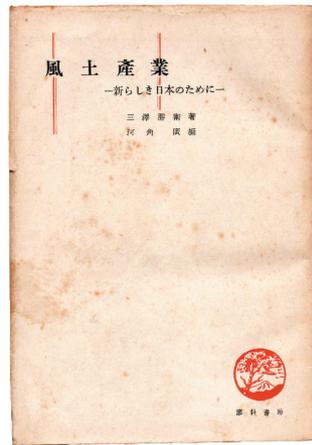


図3: 河角廣編『風土産業』  
(蓼科書房)

## 4 最初の『風土産業』(1941年)

最初に三澤勝衛著として『風土産業』が出版されるのは1941年です。三澤は1937年に亡くなっていますので、没後の出版です。信濃教育会編の信濃青年叢書として信濃毎日新聞社から刊行されています(図2)。

「序」では、もとの出版社である古今書院から無償で版權を移譲され、また遺族からも許諾を受けたことが記されています。さらに「本書は前述の通り新地理教育編中の風土産業一編を別冊として刊行したのであるが、紙数の関係上抄録にとどめた所もあり、又多少補訂を加へた所もある。これ等は何れも東京帝国大学地震研究所河角廣博士指導の下に、三澤春郎・小林茂樹・向山雅重三氏の多大なる御尽力を煩はしたものである。」とあるように『新地理教育論』後編第三章を単行本化するとともに原本とまったく同じというわけではないことも明記されています。

価格は1円で、当時の米10kgは3円32銭1厘ですので、比較的入手しやすい価格だったのではないかと思います。また、信濃教育会がかかわり、地元紙の信濃毎日新聞社からの出版で、かつ三澤の没後まだ4年ですので、直接教えを受けた人達も含め、広く読まれたのではないかと思います。

## 5 「緒言」がついた『風土産業』(1947年)

次に『風土産業』が出版されるのは1947年です。戦後まだ2年しか経っていません。

三澤勝衛著、河角廣編とされ、『風土産業—新しき日本のために』のように副題が与えられています(図3)。版元は、蓼科書房で、岡谷市で林清市という方が運営されていた出版社のようです。

『新地理教育論』の後編第四章と三澤による2編の論文も併載されています。

内扉の裏には「小著を田園に、工場に、はたまた街頭に／実際に働き、実際に労苦する青年に贈る」(／は改行)ということばが記されています。

「門人 河角廣」の記名のもと、「我が国は今未曾有の艱難に際会して居る。」で始まる「序」が冒頭にあり、戦後の厳しい時代背景がよくわかります。

本文には「由来時、処、人は三位一体である。従つて産業は勿論苟も吾等がその何事かをなさんとする場合、その時代と場所とを無視或は忘れて、充分の効果を修める事の出来ない事は洵に明かである。」で始まる「緒言」が最初に置かれています。

この「緒言」は『新地理教育論』にはないもので、1941年刊の信濃毎日新聞社版の『風土産業』にもありません。三澤自身による記載の事実が確認されないものです。誰の執筆かわかりませんが、次の古今書院版にも引き継がれます。

価格は、100円です。当時の米10kgは76円34銭2厘でしたので、やや高めであり、全体の内容量から考えると最初の『新地理教育論』に近い価格設定ではないかと思われます。三澤の没後10年であり、徐々に三澤から直接教えを受けていない人達にも読まれ出したかもしれません。

## 6 古今書院に戻った『風土産業』(1952年、1986年:新装版)

1952年に版元を古今書院に戻して『風土産業』が出版されます。副題はなくなり、蓼科書房版で併載された『新地理教育論』後編第四章と2編の論文は外され、『新地理教育論』後編第三章「風土産業」のみで構成されます。また、内扉裏にあったことばは掲載されていません。河角廣氏

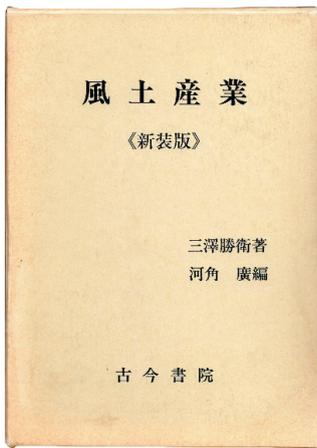


図4:河角廣編『風土産業』  
(古今書院、新装版)



図5:矢澤大二編『三澤勝衛著作集3風土論II』(みすず書房)

による「序」と蓼科書房版に付載され筆者未詳とした「緒言」はそのまま掲載されています。1986年には、同じ内容で紙質を新たにした新装版が刊行されます(図4)。

1952年版は300円で、当時の米10kgが620円です。1986年刊の新装版の価格は、2800円で、1986年の米(標準価格米)10kgは3780円です。いずれも、文系の大学テキスト程度の価格で、それほど入手が厳しい価格ではないようです。新装版の時代になると、三澤の教え子のさらに教え子たちが活躍しはじめる時期です。その時期に新装版が出たということは、読者の要請やそれによる継承ははかられたことも考えられます。

なお、1952年版の巻末には、三澤勝衛『新地理教育—社会科指導実践のために』(A5判上製本244頁、古今書院、230円)の広告が掲載されています。実物は未見ですが、国立国会図書館デジタルコレクションの目次で確認する限り『新地理教育論』の前編第二章までを収めたものようです。

## 7 みすず書房版著作集の中の「風土産業」(1979年)

1979年にみすず書房から、矢澤大二編による『三澤勝衛著作集』が刊行されます。全3巻の著作集の第3巻に『新地理教育論』後編「社会を対象としての地理的教化」を収め、タイトルを『風土論II』として刊行されました(図5)。凡例には、もとの『新地理教育論』とこれまで『風土産業』として刊行されたものとのお主な相違点もあげられていて参考になります。

この著作集の装丁は、いかにもみすず書房らしいデザインです。学生時代から、辻まことや矢内原伊作の著作を愛読していた私には、とても親しみを覚えるものでした。

この第3巻の価格は3000円で、当時の米(標準価格米)

10kgは3370円ですので、専門的な著作集としては良心的な設定だったと思われます。

三澤勝衛の著作を刊行した古今書院とみすず書房は、いずれも創業者が諏訪地方の出身です。古今書院の橋本福松氏は、諏訪市の出身で、自身も地理の教育者でした。みすず書房の小尾俊人氏は、茅野市の出身です。そのようなつながりがこれらの出版と無関係ではないはずです。

また、それぞれの編者である、河角廣氏と矢澤大二氏はいずれも諏訪中学校における三澤勝衛の教え子で、河角氏(1918年入学)は東京大学地震研究所所長を務めた地震学者、矢澤氏(1926年入学)は東京都立大学で教鞭を執った地理学者です。

## 8 21世紀の著作集の中の「風土産業」(2008年)

21世紀に入って、農山漁村文化協会(農文協)から全4巻の著作集が刊行されます。『新地理教育論』は、第2巻にその前編まで、第3巻には後編の第三章まで、第4巻には後編の第四章が収録されています。第3巻は「風土産業」関連論文を冒頭に置いた上で、『新地理教育論』後編の第三章までを収録して、タイトルを『風土産業』としています。全体として、現在の読者を対象とした読みやすさが意識されており、凡例に記載されている通り、見出しの追加や、原文の見出しに対する変更も行われています。編集は木村信夫氏が担当されました。

このように全集から『新地理教育論』を読み通そうとすると、3冊に分かれながら間に別論文が挟まれるという、やや特殊な扱いになっている点に注意が必要です。この構成はやはり「風土産業」に重点を置き、それを強くアピールするものと見られます。その点で、「風土産業」を志向する読者には理解しやすい作りになっています。ただ

し、三澤勝衛についての研究を本格的に実施する場合の引用にあたっては、原典との異なりに注意が求められます。

第4巻には解説論文が掲載されており、三澤勝衛を現代のわれわれが受け止めるにあたっての参考と便が図られています。

## 9 読み継がれる『風土産業』(2016年)

2016年に志村明善編著『三澤勝衛「風土産業」を読む—未来をひらく真の地方振興の道』があざみ書房から刊行されます。

前半は「風土産業」(『新地理教育論』後編第三章)を読みやすいように章立てや見出しを工夫する形で収録し、後半は「風土産業を読む」として志村氏による解説が掲載されます。サイズは新書サイズで、手に取りやすいように工夫されています。

## 10 “風土産業”の継承

旧制中学校が5年制(入学時12歳から卒業時17歳)であったことを考慮すると、1903年から1925年の約22年間に生まれた人々を除く世代は、諏訪中学校で三澤の授業を受けることはなかったこととなります。したがって、この幸運な22年間の生まれの人々以外の多くは、基本的に書かれたもので三澤に接したことになります。

もっとも、三澤勝衛は信州各地で講演も行っていましたが、授業以外での交流についても留意が求められます。

また、諏訪中学校で授業を受けたとしても、本を通して三澤に再会したという人もいただろうことは、想像に難くありません。

このようにして、代表作“風土産業”は受け継がれてきたと考えられます。ただし、世代ごとに読まれた“風土産業”は異なることが十分に考えられます。

諸本の間を整理しておきましょう。

書名	出版社	刊行年	新地理教育論からの掲載箇所	関連論文	緒言
新地理教育論	古今書院	1937			なし
風土産業	信濃毎日新聞社	1941	後編第三章	なし	なし
風土産業	蓼科書房	1947	後編第三章・第四章	あり	あり
風土産業	古今書院	1952・1986	後編第三章	なし	あり
著作集3巻 風土論Ⅱ	みすず書房	1979	後編第一章～第四章	なし	なし
著作集3巻 風土産業	農文協	2008	後編第一章～第三章	あり	なし
風土産業を読む	あざみ書房	2016	後編第三章	なし	なし

『新地理教育論』(古今書院)の中の「風土産業」は、4年後に独立した単行本の『風土産業』(信濃毎日新聞社)として刊行されます。

さらに6年後には「緒言」が付いた河角廣編『風土産業』(蓼科書房)にバトンタッチします。この「緒言」付き『風土産業』は古今書院に戻ってからも長く刊行され、いつまで刊行が続いたのかは不明ですが、1986年には新装版になっていることから20世紀末くらいまで継続されたのではないのでしょうか。

一方、オリジナルに近い「風土産業」は1979年にみすず書房から著作集の中で刊行されました。こちらには「緒言」は付いていません。

21世紀に農文協から出版された著作集は、三澤の没後70年を経て、社会も大きく変わったことから、複数の解説を最終巻末に収めるなど、読者を強く意識した編集がなされています。

2016年の『風土産業』は、三澤の思想の啓蒙が強く意識されています。

「市民科学」の研究の中では、三澤勝衛という信州そして諏訪における市民科学の源流の一つと目される人物とその著作からの流れをとらえることが求められます。

その際に、著作からの影響を考えるにあたり、最も重要と目される“風土産業”にバリエーションがあることを見過ごすわけにはいきません。

現在のわれわれが三澤の思想を理解する上では、21世紀に刊行された著作集と『風土産業』は、解説が施されていて、大いに手引きになります。ただし、20世紀に市民科学を実践した人々が読んだ“風土産業”は、それらと同じではない点に注意が必要です。

原著の一部として「風土産業」を読んだのか、「緒言」のない『風土産業』を読んだのか、「緒言」の付いた『風土産業』を読んだのか、はたまた著作集を通して読んだのか。それぞれによって三澤から受けた影響は、多少なりとも異なるはずですが、「市民科学」を歴史的にとらえる上では、このようなことも意識しながら、考えていくことが求められるはずですが。

大西拓一郎(国立国語研究所)

# 市民科学としての民俗学—節分は正月か?—

## 1 はじめに

元来、民俗学は在野の学問として出発した。日本の場合、それまで郷土研究などと呼ばれていた民俗学は1930年代に近代学問として整備されたが、それを主導したのは柳田国男であった。柳田国男は、民俗文化を①有形文化、②言語芸術、③心意伝承の3つに分類し、民俗学の究極の目的は心意伝承の究明にあるとした(柳田1934)。そして、その心意伝承は同郷人でなくては到達が難しいとした。そのため、柳田は戦後間もない1947年、東京郊外の砧村(現、世田谷区成城)にある自宅に私設の民俗学研究所を開設し、そこに地方から東京にやってきた有為の若者を集めて民俗学の手ほどきをした。そうした若者は将来的には生まれ故郷に帰り、その地域の民俗学の担い手になっていった。また、地方に在住する人には、柳田は自身が主宰する『郷土研究』や『民間伝承』などの雑誌に、地域の民俗について投稿を促したりもした。まさに同郷人による郷土研究が民俗学の出発点にある。

もう一つ市民科学としての民俗学にとって大きな意味を持っていたのが、自治体史の編纂である。日本では、都道府県から市町村、集落単位までさまざまな行政単位で自治体史が編まれている。そうした自治体史には多くの場合、民俗編がその一部に組み入れられていた。それは日本における自治体史の大きな特徴と言ってよい。そうした自治体史の民俗編を実質的に担ったのが市民として地域に暮らす同郷人である。それは、柳田国男の民俗学研究所で養成された人だけでなく、地方に在住しつつ雑誌『郷土研究』や『民間伝承』に熱心に投稿する人たちであった。

自治体史でも民俗編の場合、表向きは中央の研究者(たいていは大学教員)が代表者となっても、実際にその地域で調査をし、資料を集め、原稿を執筆するのは地元暮らしに暮らす在野の研究者であった。こうした在野の研究者層が、日本の民俗学を担い、近代学問としての水準を底上げしてきたことは間違いない。長野県はその典型と言ってよい。

## 2 長野県民俗の会と長野県史

長野県民俗の会は1971年に設立されて以来、半世紀を超す活動の歴史がある。まさに市民科学の会と言って

よい。地元の学校教員や郷土史家が中心となって設立した在野の会である。設立の趣意書を見ると、日本が高度経済成長期のまっただ中であって、地域の民俗文化が大きく変容し失われつつあることに強い危機感を持った有志の会であったことがわかる。

この長野県民俗の会の50年間を概観してみると、会の活動にひとつのピークが存在することがわかる。それが、1970年代前半から90年代前半まで、つまり長野県史民俗編(長野県1984-1991)の編集が行われていたときである。長野県史は民俗編だけで14巻を数え、他県に例を見ない規模であったが、そのため長野県にあって民俗学に関心を寄せる人はほとんどがそれに関わったと言ってよい。当然であるが、長野県民俗の会の活動を担う中心メンバーは県史民俗編の編集委員とも重なっていた。まさに在野の研究者が長野県史民俗編を支えていた。ここに至り、長野県では、中央と地方、在野と非在野といった区別は民俗研究の質においてもまた量においても意味がなくなるといえる。

長野県史民俗編14巻を編纂するためのデータの収集は1970年代前半に始まる。まず、県内に調査地点として430か所(計画当初は500か所)が選定される。長野県史では明治22年(1889)の旧町村(391か所)を基本単位としてその中に1から数か所の調査地点を配置していった。それは旧村の分布が人口の比率にある程度比例するという前提があるからである。人口密度が稠密な都市部ではそうした原則は適用できないが、その場合には隣接した区域(町内)が調査地に設定されないよう配慮している。

調査項目は、調査地点ごとの民俗誌作成を想定し、まず衣・食・住や生産生業など12の大項目を設け、さらにその下にそれぞれ50個前後の質問項目が設けられた(倉石1976)。こうして全体で555の質問項目が設定されたが、その全項目について県内に在住する民俗学に興味を持つ人たちが地方委員として任命され、彼等が調査者となって現地を訪れ聞き取り調査にあたった。回答は1項目に1調査カード(B6版横型)を基本としたが、こうした民俗誌調査により収集された調査カードは20万枚を超える。このとき重要なことは、上記の民俗誌調査は、当初から民俗地図を制作することを念頭において行われたことである。

こうした民俗誌調査は、その実施体制が中央集権的で、しかも集められたデータは項目羅列的で項目間に有機的

連関性が見いだせないという批判がなされたが、一方で均質なデータが今までにない密度で収集されているという利点もある。この利点を生かすことができるのが民俗地図であるといえよう。県の単位で430地点のポイントを有し、民俗の分布図を描けるのは長野県を以てない。ちなみに、1970年代から80年代にかけて、文化庁では都道府県ごとに国庫補助を出して民俗文化財緊急分布調査をおこなっているが、その時の調査ポイントが1県あたり約150カ所であることを考えると、長野県史民俗編はその3倍近い調査密度を持っている。

長野県史民俗編の刊行は1991年をもって完了したが、それに連動するようにその後は長野県民俗の会の活動も徐々に停滞していった。長野県民俗の会にとって長野県史民俗編の存在がいかに大きかったか改めて感じる。

しかし、ここにきて長野県民俗の会の活動として、長野県史民俗編の時に収集された430地点の民俗誌データが活用できないか問題提起された。長野県史では確かに全14巻の民俗編が出版されているが、430地点の民俗誌データが持つ潜在力からすればそれはごく一部の報告に過ぎない。そうした反省のもと、2022年には元県史編纂委員会を中心に長野県民俗の会の中に民俗地図研究会が立ち上げられた。再度、活動を盛り上げる機会となるかどうか、これからが市民科学としては正念場である。そんなこともあり、2024年には日本民俗学会の年会において、民俗地図研究会の有志5人が「民俗地図の理論と実践」というタイトルでグループ発表を行う予定である。

### 3 民俗地図とは

現在、日本ではさまざまな分野で情報のデジタル化・アーカイブ化が進んでいる。しかし、本来、定性的なデータを重視してきた民俗学はそうした多大なデータに対応する有効な方法論を未だ見いだせないでいる。

民俗地図による定量的な研究の端緒を開いたのは柳田国男の『蝸牛考』である(柳田1930)。その「蝸牛異称分布図」を描くために柳田国男は1927年に1000通に及ぶ蝸牛方言の全国的な質問紙調査をおこない、その成果として京都を中心とした周圏論を提起した。ただし、柳田は日本を一元的に捉える周圏論に拘ったがため、民俗学方法論として民俗地図が正当に評価されることがないまま現在に至っている。

特定の民俗事象を取り上げてなされる小縮尺の民俗分布論ではなく、民俗誌に基づく中縮尺の民俗分布論を行

う必要がある。長野県民俗の会のねらいはまさにそこにある。日本には1990年の時点において公開されたものだけで5200の民俗誌が存在する(国立歴史民俗博物館online:minzokusi.html)。またそれ以外にも、自治体史編纂時に作成されたものなど、未公開の民俗誌データが数多く存在する。そうした民俗誌の多くが網羅的な項目調査によるものであるが、この膨大な資料群は日本の民俗学が世界に誇るべき財産といってよい。この民俗誌データを活用して民俗地図を描くことで、民俗誌の項目としては個別に記されている複数の民俗事象について、その間の有機的な関係性を議論することができるようになる。

民俗地図とは、民俗事象に位置情報を与えることで可能となる、民俗分布に関する分析手法である。つまり民俗地図は方法であり、それを作ることが目的ではない。民俗地図の描き方は、①民俗分布図(点)、②民俗領域図(面)、③民俗線形図(線)がある。民俗事象の分布をGIS(地理情報システム)により描き、それを重ね合わせることで、異なる民俗事象間の関係性や、地理情報・歴史情報・社会経済情報といった民俗以外の事象との関係性を読み取ることが可能となる。日本全体を1枚の地図で見ると小縮尺の民俗分布論は、民俗語彙のような特定の事象しか取り上げられないこと、データの不足と偏り、民俗誌データとの乖離など問題が多い。そのためまずは県・地方といった中縮尺の民俗分布論が必要である。これにより、民俗誌データを活用しさまざまな事象間の有機的連関性を明らかにすることで、民俗の地域性を論じることができる。そうすれば中縮尺の議論からでも日本全体に及ぶ抽象度の高い議論は可能である。

### 4 民俗地図で読む年取魚

ここでは正月儀礼の一つである年取魚(正月魚)に注目して、民俗地図を用いることで明らかとなる年取魚の習俗について試みる(図1)。年取り(年越し)の儀礼はかつて1月中旬に繰り返しおこなわれていた。1月1日(大正月)、1月7日(六日年)、1月15日(小正月)、1月20日(ハツカ正月)、31日(ミソカ正月)である。そうした中、注目されるのは、2月3日の節分正月である。

長野県史のデータを用いて節分の年取魚の分布をみると図2のようになる。それによると、長野県においては、追儺会としての節分行事とは別に、年取りとして意識される節分が色濃く認められることがわかる。また、年取魚としてはイワシのほかにも、サケやブリといった1

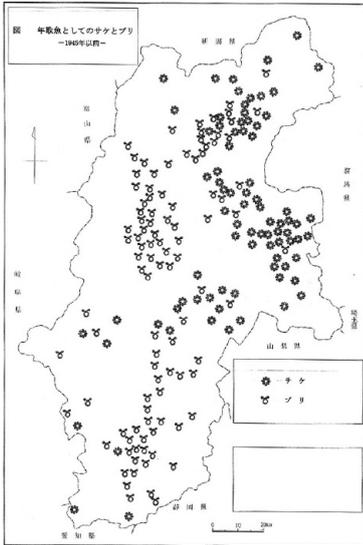


図1

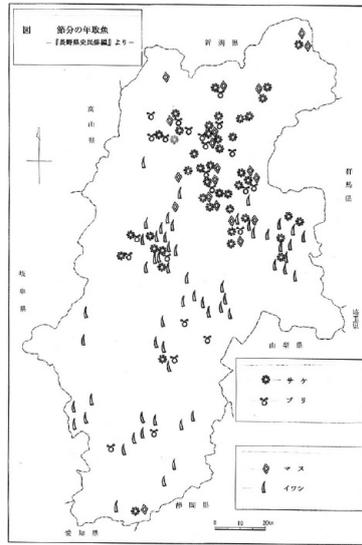


図2

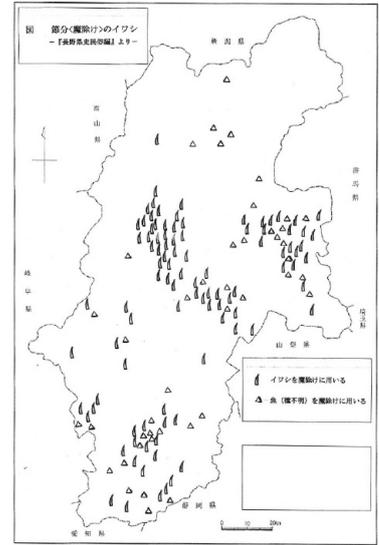


図3

月におこなわれる種々の年越し儀礼と同様な魚が用いられていることも分かる。

長野県史のデータからは、まさに立春を正月とする観念が節分行事には残っていることが理解される。一方で、大晦日から食べ続けられたブリやサケが1月20日や31日をもって食べ尽くされることをみると、1月20日や31日を仕舞正月や骨正月(年取魚が骨しか残っていないことの比喩)と称するように、やはり正月が20日や31日をもって終わるとする観念もみられるわけで、節分がいち早く年越し儀礼としての性格を失ってゆくきっかけを年取魚が与えたということもできる。

つまり、節分の儀礼においては、歴史的展開の中で、歳祝のような人生儀礼的側面が失われて年中行事への特化が起こった。またそれと同時に年中行事としては節分の中から正月儀礼の意識が失われ、「鬼は外」に象徴される追儼会が取って代わった。それは、節分という行事が、年取りから厄除けへと変化したことを示す。

次に、長野県史データをもとに、節分に用いられる年取魚の魚種について検討してみる。図2を見て、まず言えることは、他の年取りに比べ、イワシの率が高いことである。また、年取魚の習俗とは別に、節分の魔除けとして用いられる魚に注目するとおもしろいことが分かる。長野県史データをもとに節分のとき魔除けとしてイワシを用いるところの分布を描いたのが図3である。同習俗が長野県の中南部に多く見られるのに対し、北部は希薄である。そうした分布は、図2に示したように、節分の年取魚としてイワシを用いるところとほぼ重なっており、サケやブリが用いられる地域とは補完関係になっている。

節分の魔除けに用いられる魚はイワシが圧倒的に多い。ヤキカガシ(焼き嗅がし)のように焼いた魚の頭を串に刺

して門口におく習俗に用いられるのはイワシである。年取魚と魔除けの魚とはイワシを用いるという点で関連するといつてよからう。

年取魚としては、長野県の場合はとくにサケやブリが重視され、なかでも大正月(1月1日)の年取魚はその傾向が強い。注目するのはそうしたとき、経済的にブリやサケが用意できないとイワシやサンマといった安価な魚が年取りに用いられるという言い方がたびたびされることである。この点を考えると、正月儀礼としては、主にブリやサケを年取魚に用いる1月1日の大正月がもっとも重要で、節分はイワシを用いればよい程度の存在になったともいえよう。

また、大正月の年越しがサケやブリに特化してゆくと、1月1日からもっとも遠い年取りであった2月3日の節分は鬼や魔を追い払う追儼の性格を強めるとともに大正月との違いを強調するためあえてイワシを用いるようになったということもできる。つまり、節分においてはイワシは年取魚としての性格を弱め、ヤキカガシのような追儼のためのものに変化していったことになる。それは、年取魚が年越しにおける神人共食のための供物・食物から鬼や魔を払うための呪物へとという変化と捉えることができる。

安室 知(神奈川大学日本常民文化研究所)

引用参考文献

- ・倉石忠彦 1976 『「長野県史」民俗資料調査のあゆみ』『信濃』28巻1号
- ・国立歴史民俗博物館「民俗誌データベース」<http://www.rekihaku.ac.jp/doc/gaiyou/minzokusi.html> (2016.9.30)
- ・長野県 1984-1991 『長野県史民俗編』全14巻(資料編12巻・総説編2巻)、長野県史刊行会
- ・柳田国男 1930 『蝸牛考』刀江書院
- ・柳田国男 1934 『民間伝承論』(第三書館、1986)

## 諏訪で見つかった「星の和名」信州で発見された新天体 一星の名前と市民科学一

2024年7月7日から9月8日まで、茅野市八ヶ岳総合博物館において、天体の名前をめぐっての展示「諏訪で見つかった「星の和名」信州で発見された新天体一星の名前と市民科学一」を開催しました。星や星どうしのつなぎ方には、教科書で教わるもののほかに、古くから民間でも名前が与えられてきました。それを収集して、世に広めたのが英文学者で星の文筆家として知られる野尻抱影氏でした。そのきっかけとなった諏訪からの報告の手紙など、貴重な資料を多く展示しました。また、新しく見つかった天体の命名法の解説や月面や火星面の地形や名前もARやVRを使って体験できるように工夫しました。ちょうど夏休みの時期でもあったことから、遠方からのお客さんもたくさん来て、楽しまれたようです。星の和名ワークシートや和名星座表、火星VR体験などを市民科学プロジェクトのサイトに展示アーカイブとして掲載していますので、ぜひご覧ください。



## 知らなかった！諏訪ことば

昨年度、茅野市八ヶ岳総合博物館で開催したミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」を2024年5月14日から5月31日まで、場所を変えて、茅野市中央公民館でロビー展示として開催しました。ご当地でもあり、方言カードは好評を博し、多くの方に楽しんでもらえたようです。カードはWebブックとして、こちらのQRコードからご覧いただけます。



## プラネタリウム

### あの夏の太陽が教えてくれたこと

市民科学プロジェクトがこれまで明らかにしてきたように、太陽黒点の観測では、信州、諏訪地方の人々が継続的、長期的な成果をあげてきました。そこには、高校生たちによる観測の継承も含まれます。市民科学プロジェクトは、このことをテーマとしたプラネタリウム作品「あの夏の太陽が教えてくれたこと」を制作し、2024年5月12日から9月29日まで、茅野市八ヶ岳総合博物館で放映を行いました。モデルとなった長野県諏訪清陵高等学校の皆さんにもご覧いただくことができました。作品は、市民科学プロジェクトのサイトからも動画としてご覧いただけます。

### トモエゴゼンは眠らない

東京大学木曾観測所開所50周年にあわせ、2022年度制作のプラネタリウム作品「トモエゴゼンは眠らない」が、2024年10月5日から12月28日まで、茅野市八ヶ岳総合博物館で放映されています。放映日などについては、博物館のホームページでご確認ください。

## 追悼 藤森賢一氏

約70年にわたり太陽の観測を継続されてきた諏訪市の藤森賢一氏が2024年5月16日にお亡くなりになりました。享年89歳でした。市民科学プロジェクトにも多くの情報をお寄せいただき、大変お世話になりました。これまでの展示やプラネタリウム作品の作成も、藤森様から多くのことを教えていただくことで、実現できました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

茅野市八ヶ岳総合博物館では、藤森様の追悼展を2024年5月25日から7月5日まで開催しました。

## シンポジウム

方言学、民俗学、地理学など人文系の市民科学をめぐってのシンポジウムを2026年2月11日に諏訪市駅前交流テラスすわっチャオで開催します。今回も対面・オンラインのハイブリッドで行い、参加費は無料です。詳しくは、2026年1月上旬からウェブサイトでご案内を開始する予定です。



市民科学プロジェクト 市民科学ニュースレター No.5

発行日：2024年10月25日発行

編集・発行：国立国語研究所 制作・印刷：(株)エイブルデザイン

市民科学  
プロジェクトHP

